

# マリオ・マレガのキリシタン史跡調査

—1937～38年—

田中裕介

## はじめに

本稿の目的は、マリオ・マレガが大分での宣教時代に行ったキリシタン史跡、とりわけキリシタン墓地の現地調査の内容をまとめることにある。マレガが行った現地調査は必ずしも墓地のみではないが、調査対象の大半はキリシタン墓地と報告されている。近世のキリシタン史料の収集と並行して行われた1937（昭和12）年から1943年までの数年間の調査の実態と、マレガのキリシタン墓に対する視点に注目する。マレガの史跡研究活動は昭和10年代の昭和戦前期と、戦後の再来日から1950年までの大分教会時代、1953年から1958年までの臼杵教会時代の3期に分けることができるが、本稿は戦前の初期の調査とくに最初の1937～1938年の2年間に焦点をあてる。最初の2年間の調査成果がその後の調査のルールを敷いたと考えるからである。

そのなかでマレガの史跡研究の始まりとなった1937年前後の研究環境を整理して、マレガがなぜ史跡調査を始めたのか、そのきっかけは何か、マレガの研究に影響を与えたもの、マレガがどんな特徴をもってキリシタン墓碑とみなしたかなど、マレガの調査の変化をたどりながら考える。

なお根拠とした資料は①大分新聞、豊州新報など大分県内発行の地方紙と日本カトリック新聞などの専門新聞の記事をおもに利用したほか、②当時マレガが居住した大分市内で活発に活動していた大分史談会の機関紙『大分史談』1～3輯の「雑録彙報」記事、③マレガ自身が新聞に掲載した署名記事や「豊後切支丹遺跡」（『続豊後切支丹史料』1946に所収）などの公表された論文著作物、さらにマレガ・プロジェクトによって存在が明らかになったマレガ自身の調査

メモやノートなどである。加えてマレガが踏査した史跡や墓地のほとんどを、筆者は偶然にもこれまで調査してきた。その調査体験との比較が背景にあることを明記しておきたい。

## 1. マリオ・マレガのキリシタン史跡および墓碑研究

1902（明治35）年に当時オーストリア＝ハンガリー帝国領であったゴリツィアに生まれ、第一次世界大戦後に「イタリア人」になったマリオ・マレガが、イタリアを本拠とするサレジオ会の宣教師として来日したのは1929（昭和4）年12月、27歳の時であった。最初の赴任地宮崎県から大分教会に移ったのは1931年12月とされる<sup>2)</sup>。満州事変が勃発して間もない頃である。マレガの日本文化研究の始まりは大分時代に先立つ宮崎時代からである。日本語の習得に伴い『古事記』のイタリア語翻訳が始まり、大分に赴任してもその作業を継続し1935年1月には翻訳を終了している<sup>3)</sup>。マレガが『古事記』のイタリア語訳に専心していた1932年から1934年までの時期は日本では五・一五事件から国際連盟脱退へと国際的孤立に至る時期である。その時期マレガはカトリックの布教<sup>4)</sup>に関わる日本語の著作を立て続けに執筆し、ドン・ボスコ社から出版している。この時期まではドン・ボスコ社の設立者でもあるアンジェロ・マルジャリア神父が大分教会の主任であり、マレガが彼を補佐する立場にあった。マルジャリア神父が東京に異動して、1935年4月にマレガが大分教会の主任を引き継いだことをきっかけに、みずからの考えにもとづいて教会活動の一環として豊後キリシタンの研究を進めていく条件が整ったと考えられる。

教会主任となった頃からマレガの豊後キリシタン研究が始まったと推測されるが、1935年から1936年頃の新聞資料やメモ等はほとんどなく、詳しい研究状態はわからない。その2年間、地元大分の新聞記事にはマレガ以外の郷土史家の行ったキリシタン史跡の報道が掲載されているにもかかわらず、そこにマリオ・マレガの名はでてこない。マレガの調査が紙面ににぎわし始めるのは1937年からである。その時期までに江戸時代の文書を読解できるほどの古文書の手ほどきをうけ、研究に向かって研鑽を積んだことは疑いない。シルヴィ

オ・ヴィータ氏がマレガの両親あてのはがきから豊後キリシタン研究を始めた時期を1933年2月と推定した記載は、5年ほど後のものと筆者は推定している<sup>6)</sup>。まずマレガの史跡調査の動向を追っていきたい。

### (1) キリシタン史跡調査の契機

江戸時代の豊後キリシタン史料を入手し、その古文書の読解ができるころまで日本研究の力を蓄積したマレガが、現地調査を始めるきっかけとなったのは大分史談会を主宰していた三重野幸夫の誘いであると考えられる。大分史談会は元新聞記者で大分市内に三重野書店という古書店を営んでいた三重野が主唱者となり、大分市と別府市を中心に大分県内に広く会員を募って1936（昭和11）年10月18日に発足した地元の歴史研究団体である。毎月1回例会として研究会を開催し、地域に残された史跡や史料を見学する現地調査をたびたび行い、多くの参加者を集めている。機関誌『大分史談』を発行し、第1輯は1937年12月に、第2輯は1938年3月に、第3輯は1939年11月に刊行されたが、その後は途絶えた。会そのものは戦後まで存続し、大分県地方史研究会（1954年設立）に会員が移行して解消している。マレガは設立時からの会員ではなく、1937年の三重野の調査に同行するなかで会の実態を知り、途中から入会したものと考えられる<sup>7)</sup>。

### (2) 初期のキリシタン史跡調査

マリオ・マレガの現地調査の経過を新聞記事や調査ノートにもとづいてたどっていこう。

こんごうほうかい  
**金剛宝戒寺・若宮八幡社** はじめてマレガの名が新聞記事に現れるのは1937（昭和12）年5月14日の豊州新報「宗麟時代の切支丹遺物 珍品手洗石を発見」という見出しのついた記事と同日の大分新聞夕刊「大分市若宮社の珍しい手洗石」の記事である。ともに大分市元町所在若宮八幡社の境内に手洗石として使用されている直方体の石造物（写真1）をマレガが円柱礎石と鑑定したと報じている。両紙とも同じ内容を報じているが、それに至る経過を詳述している豊州新報の記事を読むと、当初の状況が見えてくる。記事によれば1937年5月

12日、大分史談会の三重野幸夫が、以前からキリシタン文化との関係が話題となっていたという大分市<sup>うえの</sup>上野金剛宝戒寺の「ローマ字石」(写真2)の真偽の鑑定を「切支丹研究にも熱心で蘊蓄のある」カトリック教会マリオ・マレガ宣教師と赤岩源三郎伝道士の両氏に求めたことがきっかけと伝える。現地での実見の結果、マレガの評価はローマ字石については否定的だったが、たまたまそのとき同行者が持参した石造物の文様の写しを見て「これは切支丹のものらしい是非案内してくれ」という予期せぬ経過になり、当初予定していなかった写真1の若宮八幡社石造物の見学を行った。マレガはその石造物を「教会の門の礎石です」と発言し、これが記事となったのである(「」内記事のまま)。

この調査のきっかけとなったローマ字石は3日前の5月9日に大分史談会の第7回研究会として行われた大分市東部の史跡調査のさいに参観されて、参加者一同より疑問符がつけられたまま未解決の研究課題とされたもので、その結果をうけて三重野が個人の資格でマレガに<sup>8)</sup>鑑定を依頼したものと推定される。<sup>9)</sup>

このように最初の調査は、三重野幸夫ないし大分史談会の参加者が疑問となる問題を提示し、それに答えを出すためにマレガに鑑定が依頼されるという経過をたどっている。マレガが問題を発して大分史談会の会員に情報を求めるという経過ではなく、その逆であると考えられる。この直後の現地調査にも、同じ経過のパターンが見出される。  
**速見郡由布院村** 大分新聞1937(昭和12)年6月2日夕刊「由布院村内に“切支丹墓”の大群 マレガ氏らが発見」という見出し記事によれば、5月31日<sup>なみやなぎ</sup>速見郡由布院村(現由布市)大字並 柳



写真1 大分市若宮八幡社の手洗石

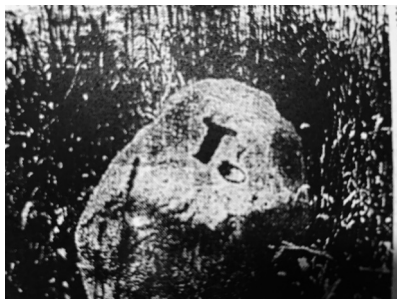


写真2 金剛宝戒寺のローマ字石(豊州新報より)

みねさき

峯先墓地他3か所を訪れたマレガと三重野幸夫が、百数十基のキリシタン墓を発見したと写真入りで報道している。記事のなかの三重野へのインタビュー箇



写真3 由布院村峯先の伏碑式墓石(大分新聞)



写真4 由布院村峯先の墓石

所によると「由布院村長溝口康雄氏は知人であるが、先年同氏から現場で鑑定を求められたことがあるからそれを思い出しマレガ氏と同行した」と述べており、三重野がまず先にこの墓地を知っており、それを鑑定するためにマレガに同行を要請している。一月前の金剛宝戒寺のローマ字石鑑定の経過と同じである。この調査においてマレガが、峯先墓地の墓石をキリシタン墓と認めた根拠は、①40×30cmの長方形の中央がやや膨らみ、地面に伏せて置く伏碑式の墓石の上面に刻まれた十字形線刻文様を、ヨーロッパの古い教会にある十字架の表現とみなしたことと、②それらの墓が地元で「ヤソ墓」と伝承されていたことである。そのためキリシタンによって造られた墓石と考えたものと推定される(写真3)。そしてさらに重要なことは、マレガは十字の表現がある四十数基のほかに十字形線刻のない100基以上の伏碑式墓石(写真4)をもキリシタン墓としていることである。ここから十字形の線刻がなくても伏碑の形がほぼ同大同形であれば同じ性格の墓

石とみなすという考古学的思考法をとっていることがわかる<sup>10)</sup>。

この初めの2回の調査までは三重野幸夫の勧誘によって現地を見に行くという、マレガにとっては受動的調査といえる。つぎの記事からはこの構図に変化が見えてくる。

**大分郡明治村** <sup>めいじ</sup>大分新聞1937(昭和12)年6月26日夕刊「天正年間に使ったキリシタン獄門石」という見出しの記事によれば、同年6月23日マレガ、赤岩伝道士、三重野の3名が大分郡明治村(現大分市)で「獄門石」と墓地4か所を調査し、各墓地からキリシタン墓碑を発見したと報じる。いまでは真偽不明の獄門石は別にして、これらの墓地は1936(昭和11)年3月に発表された久多羅木儀一郎「猪野のキリシタン墓」<sup>11)</sup>で紹介された墓地を含む場所である。久多羅木は論文のなかで、方形の一斗柁に似た形で上面に対角線の交差した線が浮き彫りにされ十字形に見える墓石を紹介した。現地調査の目的はこの久多羅木が紹介した墓石の真偽を確かめることであろう。では三重野幸夫とマリオ・マレガのいずれが主導者だったのだろうか。三重野がこれまでの2回マレガに鑑定を頼んだ石造物は、いずれも過去に文献で紹介されたことのないものだったが、明治村猪野の墓石はすでに久多羅木の文献による紹介があった。由布院村の調査でキリシタン史跡に興味と確信を得たマレガが、久多羅木の紹介した墓石の真偽を確かめるために、三重野に案内を請うたのではないだろうか。なぜそういう推測をするかといえ、このあとのマレガの調査には三重野はほとんど関わらなくなるからである。

**マリオ・マレガのキリシタン墓概念の成立** ところで明治村の伏碑の形態は由布院の形態とは異なり、正方形の一斗柁型の墓石、いわゆる「斗柁墓」である(写真5)。マレガが明治村で見た「斗柁墓」をキリシタン墓とした決め手は何だったのであるだろうか。いくつかの理由が考えられる。①広い意味で由布院村の墓石と同様の伏碑式という形態に含まれるとみなしたこと。つまり考古学的な思考による形式概念を拡張して由布院村の墓石とこの明治村の墓石を同じ形式の墓石とみなした。②明治村のこの特徴的な墓石が地元ではキリシタン墓であると伝承されていたこと。この2点は由布院村と明治村で共通する。筆者はこの2か所の調査でマレガが斗柁墓をキリシタン墓とみなすようになったと考える。



写真5 斗栱墓（大分市別保地区所在）

こうしてマレガに、由布院村と明治村で見出された、長方形ないし正方形の平形の伏碑式墓石をキリシタン墓とみなす概念が成立したものと推定され、とくに十字文様の有無にかかわりなく地面に伏せて置く平たい石（伏碑形式）を豊後のキリシタン墓と考えたのではなかろうか。その後の各地の調査では碑文の

内容に関係なく、この概念に合致する墓かどうかのポイントになっていくと考えられる。それにしても文字のない石造物の認定には相当な勇気があるが、マレガはこの時点で直観的な確信を得たようである。

### (3) 大分史談会との関係

この頃からマレガが主導して調査を行う能動的調査が行われるようになる。しかしマレガの調査には現地の案内が不可欠である。大分史談会に入会し、活動に参加することで、キリシタン史跡に関心を持つ郷土史家という知己を得、その情報・案内によって現地調査を行うという次の調査スタイルが現れる。

大分史談会は1936（昭和11）年10月18日の創立以来研究会を毎月開いていたことはすでにふれた。1937年6月の研究会まではマレガの参加は記録されていないが、同年7月11日の第9回研究会に初めてマレガは参加している。その数日前の7月7日には「日華事変」と称された日中戦争が始まっている。次回の8月29日の研究会においてマレガが会員として「伊東満所以前の羅馬に使用した使節の話」と題した講演を行い、以後たびたび研究会に参加する。同年12月に刊行された『大分史談』第壹輯の巻頭の辞で、三重野幸夫は「国史の研究と相俟って郷土史の研究こそ、郷土に即した愛国運動の先駆をなすものだ」と記す。そして同年12月7日には大分史談会主催のマレガ博士古事記伊沢完成祝賀会が、県内各地より50名の名士参会者を集めて挙行されている。お

そらく1937年の、三重野との関係が深まる5月から7月の間に大分史談会にマレガは入会したものと考えられる。

1937年6月26日の明治村の報道以後、翌年までマレガの調査の動向を示す資料は少ないが、同年8月22日大分新聞朝刊の佐藤義詮<sup>よしあき</sup>署名記事「切支丹文獻そのほか(上)」に、カトリック大分教会を訪ねた佐藤がマレガの動静を赤岩伝道士から聞いた話として、報道された墓地以外に新発見の「祈りの場所」や石の十字架の遺物がある話や、「転び切支丹人別帳」が本県より長崎の研究者に売られて残念だったという話を聞いたことを記している。マレガと赤岩伝道士が史料収集とキリシタン遺跡の調査を続けていたことがわかる。同年9月には別府市の吉祥寺を調査していることが調査ノートに記されている(マレガ文書M.DOC366、2444)。その場所はのちにマレガが別府市の遊園地ケーブルラクテンチにキリシタン墓が4基あると記した場所である<sup>12)</sup>。

#### (4) キリシタン史跡調査の進展

翌1938(昭和13)年からはマレガが発起した調査が続く。

**大野郡戸上村**<sup>とのうえ</sup> 日本カトリック新聞1938年1月23日の「切支丹伝説の地に聖堂の遺跡を発見」という見出しの記事は、前年末12月20日にマレガと赤岩伝道士が戸上村(現臼杵市、豊後大野市)一帯のキリシタン遺跡を戸上小学校長の案内で踏査し、教会跡と考えられる「クルスバ」と呼ばれる遺跡2か所を実見し、御霊園集落の墓地にキリシタン墓石、さらに鍋田集落にキリシタン墓地を発見したので、年が明けて本格的な調査に乗り出したいという希望を伝える内容である。この記事の調査の実際を記したマレガ自筆の調査ノートがマレガ資料に残されている<sup>13)</sup>(マレガ文書M.DOC365、366)。ノートは2冊に分かれてイタリア語で書かれ、手書きの地図やスケッチが描かれている。構成が整っているところからみて現地で書いた野帳というより調査後に知見をまとめたものと考えられる。資料365は「考古学遠足(Passeggiata Archeologico) 戸ノ上」と題され、「20-XII-1937」の日付があり、日本カトリック新聞の記事の日付と一致するので、1937年12月20日の調査所見をまとめたものと考えられる。資料366は「2回目 戸ノ上見学(Visita)」と題され、日付は記されていないが

1938年1月以後と考えられる。12月20日当日マレガと赤岩伝道士は大分駅から豊肥線犬飼駅まで行き、そこで地元案内役のサトウ戸上小学校長と校長に紹介された地元の郷土史家カイ氏と地元の青年学校生徒アダチ氏の5名で出かけている。ここで注目されるのは同行した地元の3名は大分史談会の会員ではないらしいことである<sup>14)</sup>。もちろん三重野幸夫は加わっていない。マレガが戸上村を調査しようとした動機は何であろうか。筆者はこの場所が考古学遠足の場所に選ばれたのは大分史談会の研究会で知り合った伊東 東<sup>あずま</sup>の情報ではないかと推測する。具体的には戸上村のクルスバを初めて紹介した久多羅木儀一郎の論文<sup>15)</sup>をもとに、そのなかで紹介されている伊東にマレガが照会をしたのではないかと推測する。1回目の調査のメインになっている西寒田クルスバおよび波津久クルスバ<sup>16)</sup>と、2回目の踏査時に見学している寺小路摩崖十字架<sup>17)</sup>はいずれも、伊東が最初の発見者でかつ報告者であったからであり、伊東からのアドバイスなしにこの考古学遠足は企画しがたいと考えられる。この考古学遠足に先立つ1937年7月と8月の大分史談会の研究会でふたりは同席していることが確認できる<sup>18)</sup>。伊東の情報をもとにマレガが、調査を主体的に計画していると考えられる。

さらにこの調査では新たに御霊園集落の村上家墓地で切妻屋根形の伏碑式墓石（写真6）を、鍋田墓地で寄棟形の大型の伏碑式墓石（図1）を発見している。扁平長方形の伏碑、斗桁型の墓碑に続いて切妻形と寄棟形の伏碑が、マレガの



写真6 切妻屋根形伏碑式墓石

キリシタン墓碑の概念に加わることになった。この段階では正方形から長方形に、さらにはかなり大型のものまで含め伏碑という形式概念で、仏教的な立碑形式と異なる墓碑をキリシタン墓と認めていくようになっていく。彼がキリシタン墓と認める石造物の種類と範囲は新たな発見とともに広がっている。年が明けて1938年になるとさらに調査は進む。

大分郡別保村<sup>べっほ</sup> 日本カトリック新聞

1938（昭和13）年3月20日の「大分地方に続出の切支丹墓」という見出しの記事によれば、この年2月13日と19日に、マレガが別保村（現大分市）の教師安部光五郎の協力を得て、旧臼杵藩領であった森町村の古墳墓を調査し、あわせて260基の墓碑を発見したと報じている。なお別保村は前年に調査した明治村の隣村である。安部は地元の小学校訓導で大分史談会の会員でもあり、1937年8月と1938年1月の例会でマレガと安部は同席していることが知られる。<sup>19)</sup>この場所が調査対象に選ばれたのは地元精通した安部の情報ということもあるだろうが、それ以上にマレガの収集文書から臼杵藩森村、森町村がともに切支丹類族の多い土地柄であることが知られることが重要である。マレガは文書に書かれた場所の現地調査を考えていて、安部という最適の同行者を得たことで踏査を実現したものと考えられる。なおキリシタン墓碑のほとんどは明治村と同じ「斗枿墓」（写真5参照）である。

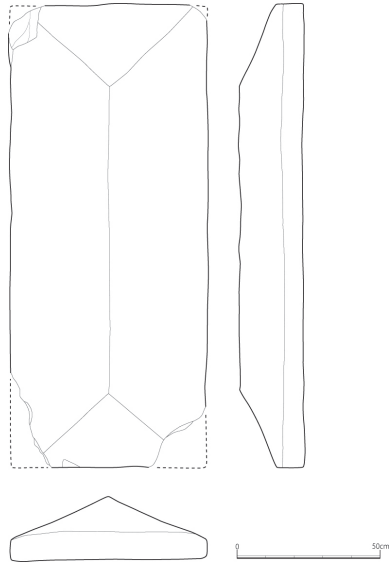


図1 鍋田の寄棟形の伏碑式墓石（鍋田キリシタン墓地2号墓）

**北海道郡臼杵町板知屋** きたあまべ いたちや 日本カトリック新聞1938（昭和13）年7月17日の「切支丹墓碑またも発見」という見出し記事によれば、過日旅行の折に鉄道（日豊線）の車窓から目撃した同地の墓地を探して、同年6月21日現地に出かけたマレガが墓地から21基のキリシタン墓碑を発見したと報じている。報道写真からみていずれも「斗枿墓」であったと考えられる。調査のきっかけは鉄道の車窓から墓碑を見かけたことにあり、マレガの主体性を示す典型的な例である。  
**北海道郡丹生村** にゅう 日本カトリック新聞1938（昭和13）年10月20日の「キリシタン墓 マレガの研究続く」という見出し記事に、同年10月17日マレガと、久々に名前の現れる三重野幸夫と、元大分師範学校長広瀬幸吉ほか1名が、丹

生村（現大分市）のキリシタン史跡調査に赴き、丹生小学校長児玉氏の先導で丹生村<sup>くど</sup>久土においてキリシタン伏碑7基を発見したと報じる。同行した広瀬は大分史談会の常連である。広瀬は近隣の古墳の調査にあたり、マレガと三重野が墓地の調査にあたった。調査の契機は丹生村が旧臼杵藩領に属し、マレガ収集の切支丹類族史料に頻繁に登場する土地であることからすると、マレガの史料調査から現地調査へ至ったものと考えたほうがよい。発見された墓碑はいずれも「斗枿墓」と考えられる。

### (5) 最初の2年間

以上の1937・38（昭和12・13）年の調査はマレガの調査スタイルと、マレガにとってのキリシタン墓の概念を生み出した。これ以後も新聞報道や日本敗戦の翌年に当たる1946年に発表された「豊後切支丹遺跡」（『続豊後切支丹史料』439-446頁）によれば、1941年2月の大分郡植田村（現大分市）の「斗枿墓」の発見のほかに、大野郡三重町赤嶺（現豊後大野市）の「斗枿墓」、臼杵町内各所の教会跡・墓碑、北海部郡<sup>したえ</sup>下ノ江村（現臼杵市）のキリシタン伏碑、北海部郡<sup>おおざい</sup>大在村の高山右近供養塔、大分郡高田村（現大分市）の能仁寺、大分郡<sup>のうじん</sup>戸次町利光（現大分市）の古戦場、直入郡竹田町（現竹田市）のいわゆる「キリシタン礼拝堂」や中川神社のキリシタン鐘、中津市の織部灯籠、日田市の大原神社など、調査は大分県内各地に及んでいるが、内容的には最初の2年間の成果を各地で敷衍する調査になっている。キリシタン墓碑の発見例は増加したが、調査スタイルやキリシタン墓碑の概念に変化はなく、最初の2年間がマレガにとってもっとも現地調査の充実した年であったと考えられる。

以下にその2年間におけるマレガの現地調査スタイルとキリシタン墓碑概念の確立過程をまとめておこう。

**調査スタイルの変化** 1937（昭和12）年初夏5月のローマ字石や速見郡由布院村の調査や大分郡明治村の調査までは、大分史談会の主宰者三重野幸夫の疑問を解明するために、マレガのキリスト教の知識を必要として現地同行を求められるという形で始まっているが、調査のなかで十字形文様や「斗枿墓」の確認などがあり、マレガ自身がキリシタン墓やキリシタン遺跡の調査の可能性を見

出したと考えられる。それ以後、同年9月別府市吉祥寺、同年12月の大野郡戸上村の調査からはマレガが自主的に調査を計画し、その案内あるいは情報提供者として大分史談会会員に協力を求めている。このようにマレガが発起して調査が始まるというスタイルに変わったために、戸上村の調査以後は三重野の参加はなくなり、毎回協力者が異なるという調査スタイルとなる。マレガの調査における主体性の確立を示している。また、三重野と同行していた頃は、大分新聞や豊州新報など地元の有力紙が即日で報道していた。三重野の前歴が元新聞記者ということもあり、旧知の記者に同行取材をもとめた可能性が高い。これに対して1937年9月以後は墓地調査の地元紙報道は少なく、カトリックの全国的業界紙である日本カトリック新聞の報道ばかりになっていく。日刊ではないカトリック新聞では、現地調査から報道されるまで10日から1か月かかっていることからみて、マレガが情報を定期的に伝えていたものであると考えられる。つまり三重野との同行がなくなるとともに、地元紙への報道はなくなる傾向が明瞭に見て取れる。

## 2. マレガのキリシタン墓碑に関する概念形成

踏査して発見した石造の墓碑、いやそもそも墓碑とすることさえ判断することが難しい石造物を、マレガは何を根拠にしてキリシタン墓碑と認定したのだろうか。マレガは日本の古典や古文書を短期間に習得したように、きわめて日本文化に勉強熱心であり、キリシタン墓碑や遺跡についての勉強や研究なしに学問的あるいは宗教的直観だけで判断したとは考え難い。そこでキリシタン墓碑について彼が参考にした可能性のある先行研究を検討しておきたい。

まず前提として、マレガのイタリアでのカトリック信仰者としての経験と知識が基本になっていることは確実である。若宮八幡社の手洗石のデザインをキリシタンのものと判断した根拠は、新聞のインタビューによれば「ヨーロッパの教会の建物によく使われている」というマレガの記憶していた意匠との類似から判断している。しかし日本におけるキリシタン墓碑の形態の知識はイタリア時代にはもちろんなかったであろう。来日以後、彼はどのような知識を取り

入れたのか。まずはマレガが調査を開始する1937（昭和12）年以前の研究とマレガとの関係をみていこう。

### (1) 関西のキリシタン墓碑の知識

日本に西洋流の本格的な考古学を導入した京都帝国大学の濱田耕作は、研究の一環として1917（大正6）年から22年の間に京都市内と大阪府下で発見されたキリシタン墓碑を集成し、キリシタン文献研究の先人新村出らと共同で1923年、『吉利支丹遺物の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第7冊を刊行した。その報告書のなかで濱田は、関西のキリシタン墓碑が板碑形と蒲鉾形（図2：今日の立碑形と半円柱形伏碑<sup>20)</sup>）に分かれ、それぞれに十字架の文様と洗礼名の使用から江戸時代初期のキリシタン墓碑であることを実証した。

この報告書を執筆した濱田耕作と、彼のもとで助手としてキリシタン墓碑の発見と実測に貢献した島田貞彦は、大野郡三重町在住で大分史談会でもマレガとなじみの伊東東とは、大正時代の臼杵石仏の調査以来（1913年頃から）の知友であり、マレガがその伊東を介して京都帝大報告の情報を知っていた可能性は高い。また京都帝大報告のなかで簡単に紹介されている中国北京の17世紀のイエズス会宣教師墓地と墓碑についても、別にマレガは詳しく知っていた可能性がある。マレガの友人にフランス人宣教師アンリ・ベルナルがいる<sup>21)</sup>。彼は中国で宣教師として活動するかたわら中国のキリスト教布教史や、北京柵欄

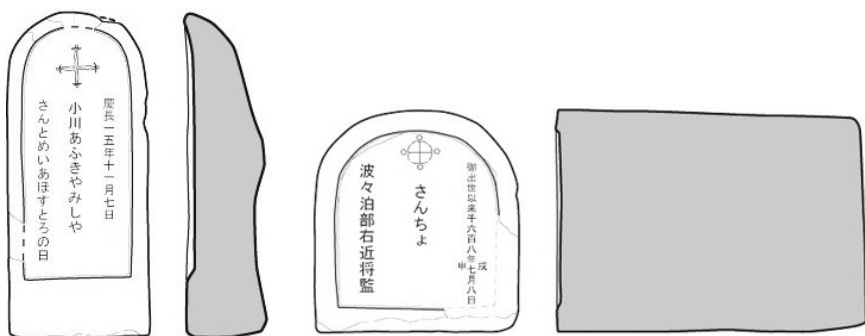


図2 関西発見のキリシタン墓碑（左：板碑形、右：蒲鉾形）

宣教師墓地の研究を行った著名な研究者で、彼との直接の交流から北京郊外の柵欄に存在したマテオ・リッチや、フェルデナント・フェルビーストの墓碑について、マレガは当時の日本人研究者以上の知識を持っていたと考えられる。

このような先行研究との接点から見て、マレガの知識には立碑形式の関西の墓碑や中国と日本の双方に分布する半円柱形伏碑がキリシタン墓であることを知っていたはずである。問題は、大分で調査を始めたマレガの眼前には、関西の墓碑や北京の墓碑とは似ても似つかない石造物が待っていたことである。とくにマレガが見出した墓碑には、端正なデザインの十字架文様や洗礼名あるいは西暦記載などのキリシタン墓碑とひと目で実証できる材料が見出せなかったはずである。つまり関西のキリシタン墓碑も北京の宣教師墓碑もマレガの導きの糸にはならなかったのではないだろうか。

## (2) 長崎・天草のキリシタン墓碑の知識

ところで、マレガが大分で調査を始める直前にあたる1935（昭和10）年1月に、熊本県天草地方において郷土史家本田古城が天草郡五和町の伏碑をキリシタン墓ではないかと問題提起し、島原半島でキリシタン墓の発見に実績のある長崎県南高来郡加津佐町の研究者元山元造を招いて墓碑の鑑定を依頼した。元山は彼が1920年代に調査した島原半島発見の墓碑の形態との類似から、天草の伏碑をキリシタン墓と認定した。その知らせはすぐに教会関係者に広まり、熊本教会のマルタン、ジボア両宣教師が来島して、写真を撮っていったと報じられた。また別の新聞記事によると元山を通じて長崎滞在中の上智大学のヨハネス・ラウレス教授が現地を訪れる意向であると報じられている。<sup>23)</sup>ここでキリシタン墓と報じられた熊本県天草地方所在の方形あるいは長方形の伏碑式墓石



写真7 天草の伏碑式墓石

は、大分県由布院村の十字架線刻のない伏碑と形態的によく似ているといっ  
てよい（写真7）。天草の情報が熊本教会や上智大学のカトリック宣教師のネット  
ワークを通じて、マレガに達していたことは十分考えられる。また元山は切支  
丹文書の購入を通じてマレガと連絡があり、彼を通じて直接島原半島の研究状  
況が伝わっていれば、天草の伏碑だけでなく、島原半島の切妻形の墓碑の存在  
もマレガは知っていただろう。

以上のように長崎と天草のキリシタン墓碑についての研究情報は、マレガの  
宣教師仲間のネットワークと元山などの研究者のネットワークを通じて、マレ  
ガのもとにもたらされていたと考えられる。

### (3) 大分県のキリシタン墓の知識

大分県では大正時代の初めに伊東東の先駆的なキリシタン遺跡の探索が行わ  
れていたがキリシタン墓碑の発見には至<sup>24)</sup>っていなかった。その後、久多羅木儀  
一郎が直入郡の切支丹類族の家の墓碑に、京都帝大報告にある熊本県菊池郡の  
墓碑と類似した十字形の彫込みをもつ墓碑の台石を指摘し、さらに大分郡猪野  
（明治村）のキリシタン墓とされた小型の伏碑を「斗柁墓」としてはじめて紹  
介した。マレガが久多羅木の論文を読んでいたことはすでに述べたように確実  
である。

### (4) キリシタン墓碑の概念の由来

マレガのキリシタン墓碑の概念は、1937年から38年の初めの2年間でほぼ  
できあがる。時系列でみると、①由布院村で見出した十字線刻のある長方形の  
伏碑および、線刻のない同形の伏碑、②明治村で発見した低いピラミッド型を  
なす上部が対角線の十字に見える正方形の一斗柁に似た「斗柁墓」、③御霊園  
村上家墓地で見出した切妻屋根形の小型の伏碑、④鍋田墓地で見出した寄棟屋  
根形の大型の伏碑の、4種類である。

このなかでも①の長方形の伏碑は、当時紹介された天草の粗製伏碑によく似  
ていて、その類似が根柢となりうる。②の「斗柁墓」は久多羅木儀一郎の提示  
した墓碑の概念を取り入れたものである。③の切妻屋根形の伏碑は昭和初期に

は島原半島でその形態の存在が知られていたものである。④の寄棟屋根形の伏碑は先行するキリシタン墓研究のなかではまったく知られていなかった形態である。こうみてくると、①と③の墓碑形態は天草と島原においてすでにキリシタン墓として紹介されていることがわかる。マレガが島原の研究者元山元造とキリシタン文書のやり取りを通じて知り合いだったことはすでに指摘されており、そこで得た知識が由布院発見の①形態の墓碑や戸上村調査のさいに③形態の墓碑をキリシタン墓碑と認定する予備知識になったと考えられる。

②の「斗桁墓」はその後のマレガの調査で繰り返し現れ、彼がキリシタン墓碑と特定するさいのもっとも重要な指標となっていく。④の寄棟屋根形の墓碑はその後、マレガの調査記録のなかにはほとんど出てこない。しかし②の「斗桁墓」と④の寄棟屋根形の形態とをキリシタン墓碑とするのは、当時も今もかなり困難がともなう。「斗桁墓」はすでに久多羅木の報告時にも、マレガ自身の報告のなかでも、仏教戒名が記されるものがあること、紀年銘は寛文年号から文化年号まで見られて、いわゆるキリシタン時代のものではないことが知られていたのである。④の寄棟屋根形はいまだにキリシタン墓としてはほかに類例のない形態である。しかしマレガはそれらをキリシタン墓碑と考えた。「斗桁墓」が数多く発見された大分郡明治村や別保村が、1660年頃から80年代に起こったキリシタン露頭事件である「豊後崩れ」の中心地であること、寄棟屋根形墓碑が発見された鍋田墓地の所有者佐藤家が切支丹類族の家であることが、根拠になったと推定される。

マレガがキリシタン墓碑と考えた①～④の墓碑の所在地はいずれも、宣教師の史料や切支丹類族関係の文書に、多くのキリシタン信者がいた場所として記載されているところであり、キリシタン墓碑とされたもっとも強い根拠は、必ずしも考古学的な形態の類似から導き出されたものではなく、むしろマレガ自身の収集した「豊後切支丹史料」の記載ではなかったろうか。

以上のようにマレガのキリシタン墓の概念は、当初彼のキリスト教の知識と類似する文様を判断の根拠とし（原の十字架碑・若宮八幡社手洗石・由布院村の峯先墓地）、西九州各地の先行研究と調査成果とを比較検討するなかで、キリシタン史料を傍証として「斗桁墓」と長方形伏碑であることがキリシタン墓認

定の基準になっていったと考えられる。しかし「斗柁墓」と長方形伏碑をキリストン墓とする根拠は、他のキリストン墓碑のように、直接墓碑に記された十字架デザインあるいは洗礼名の記載などの考古学的金石学的根拠を欠くものであったことはいなめない。「斗柁墓」の命名者といえる久多羅木儀一郎は、マレガの調査が始まってから、「斗柁墓」をキリストン墓とみなす発言を控えるようになる。おそらく考古資料と文書史料をつなぐ実証的な側面に危うさを憶えたためであろう。<sup>26)</sup>

## おわりに

当初はマレガの戦後の臼杵時代までを含めて検討するはずであったが、途中で最初の2年間の調査の過程でマレガの調査スタイルが確立し、マレガがその後、キリストン墓碑研究を行う視点が出そろっていることに気づき、そこに焦点をしばることにした。結論としては、マレガのキリストン史跡の研究は1937（昭和12）年に始まり、急速に進むこと、マレガの現地調査の背景に、先行してキリストン史料の読み込みがあること、そのことがキリストン墓碑認定の基準にも影響をあたえていること、などを指摘した。

それにしても豊後キリストン史料の収集・研究と並行した現地調査で発見した「キリストン墓碑」は一筋縄ですぐに理解できるものではなかったはずだ。案内された場所で地元の住民から「これがキリストンの墓と昔からいわれている墓石です」と言われ、真剣に石の表面のコケを払い刻まれた文字はないか、十字架の図像はないかと穿鑿しても、洗礼名も十字架の文様も見あたらない。マレガが大分で出合った「キリストン墓碑」はそのようなものばかりである。マレガはそのような状況のなかで、多くの墓碑をキリストン墓と判断している。その判断が確信に満ちていることは、その後大分を去るまで倦まず弛まず、墓地調査を続けていることから明らかである。彼がキリストン墓と認定する彼自身の基準に確信なくして、これだけの調査は続けられない。

筆者はマレガのその確信が何であったのか、その確信を得たと考えられる最初の2年間に分け入ろうとした。一応の推定は行ったが、しかし得心のいく答

えが得られたとは思わない。勉強熱心で日本語に堪能なマレガが、先行研究の知識を得て、彼の出合った墓碑や史跡を理解しようとしたことは、間違いない。しかしそれでもなお直接的かつ客観的実証のできない「斗枿墓」などの豊後の墓碑をキリシタン墓碑と確信した背景には信仰があると考えざるを得ない。

本稿の作成に当たって、マレオ・マレガの生涯の全体像を教えていただいたシルヴィオ・ヴィータ氏、マレガ研究会にお誘いいただいた大友一雄氏、マレガの調査メモやノートを読んでいただいた湯上良氏、渡辺千鶴氏、新聞資料や雑誌を教示していただいた佐藤晃洋氏、城戸晃一氏、大分県立図書館郷土資料コーナーの司書の皆さんに感謝します。

#### 註

- 1) 『大分史談』は、名目は大分史談会の機関紙であるが、実際は当時大分市若松通にあった三重野書店の店主三重野幸夫の個人経営として発行された雑誌である。1937（昭和12）年から1940年にかけて3輯が発行された。史談の論説以外に、新聞記者の経歴を持つ三重野がみずから雑録彙報を記している。史跡調査や例会の会報記事が詳細で、内容だけでなく参加者氏名をすべて列挙している。またその記事はそのつど大分新聞などの他の地方新聞に掲載され、確認することができる。参加者の氏名、調査地や調査資料の詳細を伝えて極めて史料的価値が高い情報が載っている。
- 2) シルヴィオ・ヴィータ「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父—マレガ文書群の成立過程とその背景—」（『国文学研究資料館紀要 アーカイブス研究篇』12号、2016年）、156-159頁、本書所収。
- 3) 大分新聞1935（昭和10）年9月8日朝刊に「我が古事記伊へ マレーガ氏の努力報いらる」という見出し記事が載り、そのなかでマレガが5年前から古事記の研究に着手し、本年1月に約400頁のイタリア語原稿が完成したものの出版が難航していたが、最近ほのかな明かりが見えてきたという内容である。実際に出版されたのは1938（昭和13）年である。
- 4) シルヴィオ・ヴィータ「マリオ・マレガの執筆活動とその『文脈』」（『国文学研究資料館紀要 アーカイブス研究篇』14号、2018年）、138-139頁、本書所収。
- 5) たとえば1934（昭和9）年5月5日大分新聞には、「切支丹信者秘密の信仰の洞窟」という見出しで、大分県直入郡竹田町（現竹田市）のいわゆる「キリシタン礼拝堂」が、地元の金石文研究家田部修によって発見されたと報じるが、この時点では教会関係者の名前は一切報道されていない。1936年12月18日大分新聞が「切支丹大名ジュスト右近大分県にもゆかり」という見出しで報じた大分県北海部郡大在村（現大分市）に所在する高山右近の次男の系譜をひく高山家の墓地についても、記者はマレガを取材していない。この時点でマレガはまだ『古事記』のイタリア語訳者としては知られていても、豊後キリシタン史の研究者としては知られていなかったと考えられる。

- 6) 註2ヴィータ論文159-160頁において1933(昭和8)年2月と紹介されたマレガの両親あて日付不明のはがきには「あるいは墓を探し歩いています。その成果については地元の新聞に報じてもらっています」という記載がある。この地元の新聞に報じてもらっていますというマレガの発言と符合するのは1937年5月から1938年頃までと考えられ、2月に書かれたと想定できるのであれば、その手紙の書かれた時期は1938年の2月と考えられる。
- 7) 田中裕介「豊後キリシタン遺跡の研究史・戦前編」(『大分県地方史』227号、2016年)、6頁では、マレガを大分史談会発足当初からの会員と述べたが、それはマリオ・マレガと三重野幸夫との関係が1937(昭和12)年5月の現地調査以前から存在したと考えたからであったが、今回その関係は逆であると考えられるようになった。すなわち三重野により現地調査に誘われたことをきっかけにマレガは大分史談会の入会に至ったと。
- 8) 『大分史談』1輯(大分史談会、1937年)、27-28頁。
- 9) 三重野の立場から金剛宝戒寺のローマ字石の調査経過を総括した署名記事が1937(昭和12)年5月23日大分新聞に「切支丹墓か『陽石』か 一宝戒寺羅馬字石に就て」と題して掲載されている。それによると、くだんの石の存在は1930年当時活発に活動していた大分市内の中等学校の歴史教員を中心に結成された郷土史跡伝説研究会の面々がみつけて調査して以来、大分の研究者に関心もたれていたものであることがわかり、三重野自身はマレガの見解が示されて以後も、キリシタン関係説に未練を残している。実際にその後7月9日に三重野とマレガが再度ローマ字石を訪れている(大分新聞1937年7月14日朝刊「上野律院のローマ屋敷」記事)。以上の経過から判明することは、あくまでも調査の発問は三重野であり、マレガは意見を求められた識者の一人という構図である。マレガのローマ字石に対する否定的な見解はその後変化はなかったようで、1943年7月30日大分合同新聞二豊風土記マレガ署名記事「大分上野のTの石」では「上野の石のTの字は切支丹と全然関係ないものといわねばならない」と断定している。
- 10) 十字形の線刻表現以外にマレガがキリシタン墓と認定する追い風となった状況のひとつは、熊本県天草下島の調査動向である。それについては2-(2)で述べる。
- 11) 久多羅木儀一郎「大分県下における切支丹遺蹟補遺」(『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第13輯、大分県史蹟名勝天然記念物調査会、1936年)、75-79頁。
- 12) マリオ・マレガ『続豊後切支丹史料』(ドン・ボスコ社、1946年)、446頁。
- 13) 大友一雄氏の紹介で、湯上良氏にノートの内容について教示をえた。この資料はイタリア語で書かれた2冊のノート(365と366)からなり、1937(昭和12)年12月と1938年1月以後に行われた2回の現地踏査をまとめた記録と、1937年9月の別府市吉祥寺の記録をあわせて16頁である。
- 14) カイ姓を名乗るマレガ周辺の人物として1937(昭和12)年12月7日のマレガ博士古事記伊沢完成祝賀会の来会者に名前のある(『大分史談』2輯、50頁)甲斐実男氏がいる。湯上良氏の教示によれば、マレガの他の資料に甲斐実男氏は大分県警察関係者と記されているという。その点から郷土史関係者ではなく、マレガが通っていた弓道関係者の可能性が高い。雑誌『大分史談』の会員名簿を点検しても大分史談会にはほかにカイ姓の会員はいないので、戸上村でマレガを案内したカイ氏は別人と考えられる。
- 15) 久多羅木儀一郎「大分県下における切支丹遺蹟」(『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第7輯、大分県史蹟名勝天然記念物調査会、1929年)、60-62頁。

- 16) 田中裕介「伊東東の論文『『クルスバ』と了仁寺』について」(『史学論叢』44号、別府大学史学研究会、2014年)。
- 17) 伊東石仏(東のペンネーム)「大野郡野津市村のクルス」(『白杵史談』9号、白杵史談会、1933年)。
- 18) 『大分史談』1輯(大分史談会、1937年)、30・38頁。
- 19) 同上38頁、『大分史談』2輯(大分史談会、1938年)、50頁。
- 20) 田中裕介「日本における16・17世紀キリシタン墓碑の形式と分類」(『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会、2012年)、389-406頁。
- 21) 1940(昭和15)年7月6日大分新聞によれば、来日したベルナル神父は中国に帰る途中マレガに会うため船で大阪から別府にいたり、マレガをたずね、その後鉄道で朝鮮半島の京城(現ソウル)に向かっている。マレガとベルナルはキリスト教布教史研究者として熱心な交流があったものと考えられる。
- 22) 熊本県天草地方の地方紙みくに新聞、1935(昭和10)年2月20日「古切支丹の墓碑が御領佐伊津に多数発見」の見出し記事、天草市教育委員会松本博幸氏教示。
- 23) 下田曲水『暫定天草切支丹史』(稲本報徳舎、1941年)、409-410頁に引用する新聞記事(新聞名刊行日不明)による。松本博幸氏教示。
- 24) 註16田中論文88-103頁。
- 25) 佐藤晃洋「マレガ・プロジェクトに係る平成二五年度概要調査」(『史料館研究紀要』19号、大分県立先哲史料館、2015年)、38-39頁。
- 26) 註7田中論文。